

元気で前向きな、そして優秀な人材を  
いかに育成し、活躍の場を提供するか

飯本 武志

Imoto Takeshi

(東京大学環境安全本部 (兼担 大学院新領域創成科学研究科) 教授)



これはどの業界にとっても最も重要なテーマのひとつです。放射線(能)の利用を含む130年の歴史をもつ原子力科学技術(NST)にまだまだ社会的なニーズは強いものの、人材が現に不足し、将来を懸念する声が上がっています。日本では若者の数自体の減少傾向が止まらず、多くの国ではNST分野を専門とする人材を育成する仕組みそのものが十分ではないようです。このような状況に鑑みて、国際原子力機関(IAEA)はアジア太平洋地域の中高校生にNSTの興味深さを展開するための地域技術協力プログラム(TCP)を2012年にスタートさせています。STEAM教育やWOWファクターの導入を合言葉に「中高生100万人にNST教育を」のスローガンを掲げ、第2期(2018-2021)4年間で200万人を超える教育実績を達成しました。日本はTCPのメンバー国ではないのですが、IAEAからの強い要請を受けて、米国や英国、豪州と共にNST先進国の立場でノウハウを供与する支援側として現在も協力を続けています。元々TCPは、学校教育でほとんど扱われていないNST分野にまずは目を向けていただき、リテラシーの裾野を広げることが主たる目的でしたが、教育を受けた生徒の中に、独学を深めさらなる高みを目指すメンバーが現れはじめたのです。このような生徒に追加的な動機づけをし、活躍の場を設けることこそ必要ではないかとの意見に多くのTCP参加国が賛同し、IAEAの支援を受けて国際原子力科学オリンピック(INSO)運営委員会が設立され、約3年間の準備期間を経て2024年8月、第1回大会がフィリピン(クラーク)で開催されました。14か国55名の高校生がメダルを争ったその現場に、私もIAEA専門家として派遣され、各国ナショナルチームの熱気とパワーを体感してきました。感動し、かつ感銘を覚えました。5時間にもわたる理論問題と3.5時間の演習問題は、高校生が自力で解答するために必要となる十分な誘導が設問中に記述されているとはいえ、放射線取扱主任者試験にも匹敵するような内容です<sup>1)</sup>。メダリストたちの多くは物理や数学の国際科学オリンピックを目指すような優秀なメンバーで、各国専門家によるしかるべき教育支援を受けて臨んできた様子がかげえ、その満足感と達成感、もちろん口惜しさや敗北感も会場に満ち溢れていました。我が国には複雑な事情があることは理解し、事前に承知はしていたのですが、この場に日本のナショナルチームが参加していないことを残念に思い、帰国後すぐに外務省、文部科学省、原子力人材育成ネットワーク、ANEC(未来社会に向けた先進的原子力教育コンソーシアム)等に働きかけ、ご理解やご協力をいただくことができ、2024年12月に「第2回INSO日本チーム出場支援委員会<sup>2)</sup>」を立ち上げました。第2回大会(2025年8月)はマレーシア(プトラジャヤ)で開催予定です。国内選抜予選会を経て最大4名の高校生を送ることを計画しています。英語で専門性の高い国際競技試験大会を目指すにもかかわらず、すでに想定を大きく超える数の日本の若者が挑戦の意向を表明し、彼らなりに準備を開始しています。このような元気で前向きなメンバーが活躍できそうな場をひとつでも多く提供すると共に、それぞれの特徴を大切にしつつ魅力あるプラットフォームとしていかに強く大きく成長させることができるか。対象は生徒や学生だけではないでしょう。医療、エネルギー、農業、各種産業等で今後しばらくは絶対に欠かすことのできないNST分野。すでにこの分野にいる私たち自身が本気で考え、行動することが社会に対する責務だと考えています。

## 参考

- 1) <https://www.c-technol.co.jp/wp/wp-content/uploads/2024/12/FBN577.pdf>
- 2) [https://www.jaero.or.jp/inso2\\_japan/1\\_index\\_detail.php](https://www.jaero.or.jp/inso2_japan/1_index_detail.php)